

「燈火親しむべし」

秋も深まってきました。この時期が、一年のうちで最も四季の移り変わりを肌身で感じることができ、物事や人生をじっくり考えるのに適した季節のような気がします。

季語に「燈火親し」というものがあります。歳時記には「秋涼の日がつづき、夜も長くなると読書に団樂に燈火が親しまれる」と記されています。このことから、読書の秋を象徴する季語としてよく使われるようです。

この言葉は、もともとは、「李杜韓白」と呼ばれる唐の四大詩人の一人である韓愈が、息子の符にあてて書いた、「涼しく夜の長い秋は、燈火の下で読書するのに適している」という手紙に由来するものです。つまり、中国の唐の時代に、都会で勉強している息子に対して、「本を読みなさい」と忠告した言葉が日本でこのように季語として使われているのです。

読書の秋のみならず、秋にはいろいろな形容が付きます。その内の一つ、食欲の秋を象徴する季語といえば、「馬肥ゆる」。歳時記に「鳥獣は秋になると皮下脂肪がふえて太るのが一般で、晴朗な秋空の下で馬とても豊かに肥える」とありますが、これも元をただせば中国の言葉です。

その昔、中国北方に住む騎馬民族は、秋の訪れとともに南進して辺境を脅かしたため、史記にも「秋、馬肥ゆる」時期は漢民族にとっての大きな脅威の時期だと記されています。つまり、外敵の脅威を「馬肥ゆる秋」という表現で警告していたもので、食欲とは全く関係ありません。面白いものですね。

昨年秋、本市と友好都市交流をしている南昌市へ訪問した時に、古くから陶淵明や李白、白居易などの文人大家が好んで訪れ、詩にも詠んだ、世界文化遺産でもある廬山に足を運び、中国の社会と自然とが調和、呼応しながら薫り高い文化を育てていた時代の雰囲気を感じることができました。中国の古い言葉に由来する季語には、そんな歴史的で文化的な深さを感じられる含蓄があります。

燈火の下での家族団樂や読書で、秋の夜長を楽しんでおられますか。

◆参考◆

合本俳句歳時記新版（角川書店編）